

「坊っちゃん」の

明治の学校・現代の学校

通信簿

村木 晃

Muraki Akira

學業成績通告文

検査體身		保護者印	担任教員印
年齢	10		
検査年月日	昭和28年4月		
身長	136 cm		
体重	54 kg		
胸囲	55 cm		
腕囲	24 cm		
歩高	1.2 m		
視力	右 〇 左 〇		
聴力	右 〇 左 〇		
歯並び	異常あり		
検査場所	検査者		
年齢	10		
検査年月日	昭和28年4月		
身長	144 cm		
体重	55 kg		
胸囲	78 cm		
腕囲	24 cm		
歩高	1.2 m		
視力	右 〇 左 〇		
聴力	右 〇 左 〇		
歯並び	異常あり		
検査場所	検査者		
年齢	10		
検査年月日	昭和28年4月		
身長	144 cm		
体重	55 kg		
胸囲	78 cm		
腕囲	24 cm		
歩高	1.2 m		
視力	右 〇 左 〇		
聴力	右 〇 左 〇		
歯並び	異常あり		
検査場所	検査者		

できました

學業成績通告文

学年	学期	科目	成績	順位	出席	欠席	遅刻	早退	その他	
六学年	1学期	国語	23	24	23	20	23	25	20	
		算数	23	24	23	20	23	25	20	
		理科	23	24	23	20	23	25	20	
		社会	23	24	23	20	23	25	20	
		英語	23	24	23	20	23	25	20	
		音楽	23	24	23	20	23	25	20	
	2学期	国語	23	24	23	20	23	25	20	
		算数	23	24	23	20	23	25	20	
		理科	23	24	23	20	23	25	20	
		社会	23	24	23	20	23	25	20	
		英語	23	24	23	20	23	25	20	
		音楽	23	24	23	20	23	25	20	

「坊っちゃん」の通信簿

— 明治の学校・現代の学校 —

常州大学图书馆
藏书章

村木 晃
Muraki Akira

大修館書店

[著者紹介]

村木 晃 (むらき あきら)

1955年、東京に生まれる。早稲田大学教育学部卒業、筑波大学大学院修士課程教育研究科修了。高等学校教諭を経て、現在、東京学芸大学・横浜美術大学・東京未来大学講師（非常勤）。担任学研究会の活動を通じて、教育理論の実践化と実践の理論化の研究を行っている。

《主な著書》

『ワークシートで学ぶ 生徒指導・進路指導の理論と方法』（共著 春風社 2013）、『クラス担任が自信をもって「語る」12ヵ月』（共著 学事出版 2015）など。

ぼ つうしん ぼ
「坊っちゃん」の通信簿——明治の学校・現代の学校

©Akira Muraki, 2016

NDC910/247p/19cm

初版第1刷——2016年4月30日

著者——むらき あきら
村木 晃

発行者——鈴木 一行

発行所——株式会社 大修館書店

〒113-8541 東京都文京区湯島2-1-1

電話03-3868-2651（販売部） 03-3868-2291（編集部）

振替00190-7-40504

〔出版情報〕 <http://www.taishukan.co.jp>

装丁——CCK

印刷所——広研印刷

製本所——三水舎

ISBN978-4-469-22248-7 Printed in Japan

〔注〕本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用であっても著作権法上認められておりません。

目次

はじめに 3

序章

清とピグマリオン

13

その一 清と坊っちゃんの不思議な関係

16

その二 清は「ピグマリオン」？

20

◆『マイ・フェア・レディ』の原作

27

第一章

坊っちゃんは高学歴者

29

その一 坊っちゃんが学んだ明治時代の学校

33

その二 坊っちゃんの出身校「ある私立の中学校」

37

その三 坊っちゃんが通った「物理学校」

42

その四 私立の学校にかかる費用

47

◆教育格差社会日本

51

第二章

免許が要らない時代の先生たち

53

その一 坊っちゃんは無免許先生？

56

その二 漱石も教わった士族の先生たち

65

その三 先生の月給物語

71

◆現代先生の新免許制度

77

第三章

坊っちゃんも現代先生も多忙なのだ

79

その一 坊っちゃんの日

82

その二 現代先生と漱石先生の実情

88

◆休憩時間と先生

94

第四章

坊っちゃんの時代の遠足・運動会・修学旅行

95

その一 遠足と運動会は同じもの

97

その二 大学と小学校の運動会

103

その三 修学旅行の今昔

108

◆修学旅行も変わった！

117

第五章

バツタ事件と宿直というお仕事

————— 119

その一 宿直というお仕事の由来 124

その二 宿直で殉職された先生たち 128

その三 温泉に行く坊っちゃん 134

◆「夜の語り場」はどこに 139

第六章

学士様赤シャツはスゴイ

————— 141

その一 冤罪？「赤シャツ犯人説」 146

その二 学士という「学位」 156

その三 学士様になるまでの長い長い道のり 160

◆「星の数ほど」いる平成の学士 166

第七章

坊っちゃんは、ダメ教師なのか

————— 167

その一 坊っちゃんを授業評価する 171

その二 坊っちゃんは指導力不足教員？ 180

その三 漱石「僕は山嵐や坊っちゃんを愛し候」 186

◆漱石先生への授業評価

191

第八章

「先生ぼさ」と山嵐のジレンマ

193

その一 アイスマンの解凍

197

その二 教師の類型

200

その三 ヤマアラシのジレンマ

206

◆数字で表す心の距離

216

終章

坊っちゃんのキャリア

217

その一 一か月で退職する坊っちゃん

221

その二 「たまたま」キャリアのお話

228

その三 坊っちゃんのキャリアと清

234

◆キャリア教育 四つの能力

240

引用・参考文献

241

あとがき

245

はじめに

漱石 「ときどき、自分のふるいものを読みかえすと大変なものだね。このあいだ、何の気なしに読みかえて見て、だい分、読んで見たが、いま読むと、自分のいいところ、悪いところがはっきりわかるね。」

江口 「先生はどれが、一番いいとお思いました。」

漱石 「坊っちゃんなんか、一ばん気持よく読めたね。」

江口 渙かんの「漱石山房夜話」（『わが文学半生記』講談社文芸文庫）には、こんな一節があります。門下生として漱石山房（漱石が晩年の九年間を過ごした借家。東京都新宿区にあった）に出入りしていた江口の問いに、夏目漱石が答えたものです。

めったに自分の作品を読み返すことのなかったという漱石が、「一ばん気持よく読めた」と評価した作品は、なんと『坊っちゃん』だったのです。『吾輩は猫である』から『こころ』や『明暗』に至るまで、世に傑作といわれる漱石作品は山ほどあります。そのなかで、著者自身が「一ばん気持よく読めた」と語る『坊っちゃん』とは、どんな魅力があるのでしょうか。

しかし、『坊っちゃん』を「気持よく読めた」と思うのは、もちろん漱石だけではありません。

ん。それは、岩波文庫や新潮文庫などの累計発行部数を見ても分かります。多くの人が、長きにわたって読み継いできた名作であることを示しています。国民的小説ともいわれる所以です。

ただ、『坊っちゃん』を正義感溢れる江戸っ子教師がくり広げる、勸善懲惡の痛快小説だと読むことは、一面的な読み方だと思ふのです。たしかに、渾名^{あだな}を駆使した登場人物の描写、江戸小話を思わせる会話のやり取り、活劇のような数々の事件、どれもこれも、漱石のユーモアのセンスと跳ねるような文体で笑わせてくれます。思わず快哉を叫びたくなる、楽しい小説です。

ところが、このユーモアと文体に紛れて見えにくくなっていることがあります。愛してくれない父母や対立ばかりの兄への思い。同僚である教師や愛すべき生徒との断絶。唯一の理解者「清」^{きよ}との死別。そして、誰に対しても、本音と建て前を上手に使い分けられない坊っちゃんの性格。その「真つ直ぐな気性」が読者には決定的に痛快なのですが、だからこそ、人とのつながりが持てない孤独が、常に底を流れています。それはそのまま、漱石が抱えていた心の問題にもつながっているのだと思います。だから、実は、かなり難解で哀しい小説でもあるのです。

もしかしたら、この「楽しい」と「哀しい」の絶妙のバランスが、『坊っちゃん』を「一ばん気持よく読めた」物語にしているのかもしれない。

ただし、本書はこういった『坊っちゃん』論を語るものではありません。「楽しい」や「哀しい」の話題は随所に登場しますが、ここでは、『坊っちゃん』が「学校小説」である面に注目

したいのです。

ほぼ全編を、間違いなく愛媛県の旧制松山中学校を舞台にしている『坊っちゃん』。したがって、この学校に乗り込んだ「真っ直ぐな気性」の坊ちゃん先生が躍動します。新米教師の危なっかしい授業場面もあれば、やんちゃな生徒との格闘（生徒指導？）場面も、個性的な先生同士の確執もあります。この時代には珍しい、職場の人間関係の葛藤を描いた小説だとも言えるでしょう。さらに、学校生活に関わる細かい事柄が、かなりな正確さで語られています。

つまり『坊っちゃん』には、明治時代後半期の教師生活や教職の在り方、あるいは学校制度や教育の歴史などに関わる事項が豊富に描かれているわけです。これはもちろん、漱石自身が教員だったからです。正確な記述も、現場感覚をもつて教育を論じられるのも当然です。これを見逃す手はありません。

そこで本書では、『坊っちゃん』に登場する学校や先生たちに光を当て、それによって見えてくる事象を、現代の視点から評してみようと考えました。『坊っちゃん』の通信簿、というわけです。ですから、明治時代と現代とを行ったり来たりしながら、私流の語りを展開していくつもりです。

通信簿をつけるということは、明治時代の教育に当てた光の反射光で、現代の教育の実情や問題を映し出すことでもあります。もう少し話を広げれば、明治時代の社会を鑑にして、いまの世

や私自身(皆さんご自身)を顧みることといつてもよいのかもしれませんが。通信簿とは、それを書いた人(先生)も、受け取った人(生徒)も、その自らの振る舞いを顧みる契機にすることが目的であるはずですから。

私自身は、三十数年間高校教師として教育の現場に立つてきた経験があります。そして現在は、教職をめざす大学生の授業担当者として、多くの学生たちと交流しています。ということは、「現代の視点から」とは言つても、「先生からの視点」で語ることになるでしょう。

いっぽう読者の皆さんの多くは、「生徒からの視点」をお持ちだと思います。「企業からの視点」もあるかもしれませんが、でもそれらは、対立するものでも、どちらが正しいというものでもありません。それぞれの立場から、つまりは、学校の内外から語り合うことにつながるわけです。そのことはきつと、学校や社会の見方も『坊っちゃん』の読み方も、一層深めてくれるのだと信じます。

それでは、『坊っちゃん』が主人公の「おれ」(名前が分からないのですよね)の一人称で語られているように、元教師の「私」という一人称の語りに託して話を進めていきましよう。江戸っ子の坊っちゃんには遠く及びませんが、できる限り軽やかに、ユーモアをもつて通信簿づくりに励みたいと思います。読者の皆さんも、ぜひ、その作業に参加していつてください。

《凡例》

① 『坊っちゃん』の引用は、『漱石全集』第二卷（一九八四年、岩波書店）を底本とする、岩波文庫『坊っちゃん』（一九八九年）によりました。

② 『坊っちゃん』以外の漱石作品、書簡、日記等は、底本に『漱石全集』（岩波書店）の各巻を使用し、旧字体を新字体に、原文が文語文でない文章は、旧仮名遣いを新仮名遣いに改めました。

③ 年号の示し方は、基本的に現代は西暦で表記しますが、明治に関しては、元号で「明治〇年」のように記します。その方が、「明治時代のどのあたりの時期か」が特定しやすいと考えます。

④ 教員の呼称に関しては、法的な立場を強調する場合は「教員」を使いますが、文章の流れに合わせて「教師」や「先生」を使用します。混乱はないと思いますが、ご承知おきください。

⑤ 『坊っちゃん』に登場する「四国辺の中学校」を「愛媛県立松山中学校」とします。これは、漱石自身の「あの『坊っちゃん』にあるぞなもの訛（なまり）を使う中学の生徒は、ここの連中だ」（傍点筆者）との談話があるからです（『僕の昔』）。したがって、原文以外では「四国辺の中学校」を「松山中学校」と表記することにします。

目次

はじめに 3

序章

清とピグマリオン

13

その一 清と坊っちゃんの不思議な関係

16

その二 清は「ピグマリオン」？

20

◆『マイ・フェア・レディ』の原作

27

第一章

坊っちゃんは高学歴者

29

その一 坊っちゃんが学んだ明治時代の学校

33

その二 坊っちゃんの出身校「ある私立の中学校」

37

その三 坊っちゃんを通った「物理学校」

42

その四 私立の学校にかかる費用

47

◆教育格差社会日本

51

第二章

免許が要らない時代の先生たち

53

その一 坊っちゃんは無免許先生？

56

その二 漱石も教わった士族の先生たち

65

その三 先生の月給物語

71

◆現代先生の新免許制度

77

第三章

坊っちゃんも現代先生も多忙なのだ

79

その一 坊っちゃんの日

82

その二 現代先生と漱石先生の実情

88

◆休憩時間と先生

94

第四章

坊っちゃんの時代の遠足・運動会・修学旅行

95

その一 遠足と運動会は同じもの

97

その二 大学と小学校の運動会

103

その三 修学旅行の今昔

108

◆修学旅行も変わった！

117

第五章

バツタ事件と宿直というお仕事

————— 119

その一 宿直というお仕事の由来 124

その二 宿直で殉職された先生たち 128

その三 温泉に行く坊っちゃん 134

◆「夜の語り場」はどこに 139

第六章

学士様赤シャツはスゴイ

————— 141

その一 冤罪？「赤シャツ犯人説」 146

その二 学士という「学位」 156

その三 学士様になるまでの長い長い道のり 160

◆「星の数ほど」いる平成の学士 166

第七章

坊っちゃんは、ダメ教師なのか

————— 167

その一 坊っちゃんを授業評価する 171

その二 坊っちゃんは指導力不足教員？ 180

その三 漱石「僕は山嵐や坊っちゃんを愛し候」 186

◆漱石先生への授業評価

191

第八章

「先生ぼさ」と山嵐のジレンマ

193

その一 アイスマンの解凍

197

その二 教師の類型

200

その三 ヤマアラシのジレンマ

206

◆数字で表す心の距離

216

終章

坊っちゃんのキャリア

217

その一 一か月で退職する坊っちゃん

221

その二 「たまたま」キャリアのお話

228

その三 坊っちゃんのキャリアと清

234

◆キャリア教育 四つの能力

240

引用・参考文献

241

あとがき

245